

1 池袋の“聖域”

池袋——、いけぶくろ——

山手線池袋駅。電車がとまる。ドツと吐き出される人々々々。みるみるプラットフォームは騒々しい靴音に満たされ、真っ黒にひしめきあう人の流れが出口を目指してモクモクと動いてゆく。その流れに浮んで、西口に出てみよう。

改札口を出ると、その建物が東横デパートとニッタイ・ストア。そこを通り抜けると池袋西口商店街だ。狭い道路に、無数の店舗がのしかかるように櫛比している。

池袋は、その昔はともかく、いまでは東京の一つの中心だ。池袋駅の一日の乗降者数は東京駅に次いでいる。西武武蔵野線、東上線、それから養老系統かのバスが、日まじに扱がってゆく広大なヒンターランドとここを結び、一方都心には、山手線、都電、各種のバスが間断をおかずに発している。交通の要衝、そしてまた異常なまでに繁栄している一大商業地区。

戦災で烏有に帰したこの池袋が、戦後都内のどの繁華街よりも遙かに目覚ましく復興したのは、おそらく、都心を焼きはられた都民たちが、食糧の産地を背後にもつこの街のヒンターランドに鍋釜してきたためでもあるのか!! こういう現象は、いわゆる“旧市内”と“新市街”との境を走る山手線の主要駅がある街々に共通なのだが、池袋はその中でも最も典型的な街なのである。

そしてまた池袋は、現代日本の一つの象徴でもあろう。なぜなら、この街では、新しいものと古いものが雑然と入りまじっていて、しかもなおそこに、そこはかかない調和をかもしだしているからである。

空を見たまえ！くっきりと晴れ渡った秋の空に、東横デパートや西武デパートから揚がるアドバルーンが、近代的な大池袋を誇示している。街を見たまえ！大売出しを告げるチンドンヤの笛の音が、ほこりっぽい街一ぱいに、物悲しい場末の寮開気をかき立てている。

一方では、昼かともうばかり明るいライトの下で、種習たかく地下鉄の工事が進められているかと思うと、他方では、ホノ暗い街路に手相見がズットと提灯の列をひいて、迷える人々にはかない福音を伝えている。百貨店や銀行が現代経済の先端をゆく営業をいそいでいる反面、それらがい福晋を伝えている。僅か一坪か二坪のパラツクの商店、飲食店がひしめいている。また、世々々とした建物のかけに、僅か一坪か二坪のパラツクの商店、飲食店がひしめいている。また、世々の名画を上映する映画館がずらりと並んで、何百何千という観客を魅きつけている一方、裏町の空地に陣取った小屋掛劇場からは、昔なつかしいジントクメロロディと喚声があがっている。

西口商店街は東口にくらべて、特にこういう特徴がきわだっている。狭いメインストリートを通式の大形バスがゆく。キャデラックが疾駆する。銀行から、洋装店から、ニュールックの洋服を着用した紳士、淑女がスッと現れて、ペーブメントに快よい靴音をたてる。パチンコ屋では、ジャンパーに下駄ばきのアンチヤンや、エプロンに買物袋をぶらさげたオカミサンが、ガチャンガチャンと夢中で玉をはじいている。生地屋では小僧が客を呼んでガナッている。宣伝放送が鳴りひびく。笛と太鼓の哀音が特売を告げて流れる。まことに騒音の街——池袋。古いものと新しいものとが、

二重にも三重にもからみあって激しく動いている街——池袋。

この街路の人波をくぐりぬけ、くぐりぬけ、駅から六、七百米ほどゆくと、池袋二丁目交番につきあたる。ここで街路は二つに分れ、右が商店街のつづく「バス道路」左がいよいよ「立教通り」である。——立教通りを行こう。交番の脇を通り過ると、さしもの商店も急に減って、人影もまばらになる。こうして、いままでの雑閤と騒音から解放され、何となく落ち着いた気分がただよい始める。両側の静かな商店に眼をくぼると、「立教大学御用」と書いた書店、洋服店、帽子店などの看板が下げられている。そこを二、三百米、古い樹々に囲まれた閑静な一角——ここに立教大学があるのだ。

校門を入ると、正面に、時計台をいたいだいた古式ゆかしい本館がある。本館をはさんでこの字形に右手チヤベル、左手に図書館、いずれもシットリと落ち着いた赤煉瓦の建物である。これらの建物に囲まれた前庭は、校門と時計台とを結ぶ通路をはさんで、どちらも灌木の垣で限られた柔い芝生におおわれている。この両方の芝生の中央には、それだけふかぶかとも影を落す樞と大公孫樹がそびえている。芝生と樹と時計と建物、そしてチヤベルから流れてくる清純なパイプオルガンの音——それは、魂を淨める美しい調和をたたえている。創立以来七十有八年の歴史をもつ立教大学は、文字通り静かな聖域なのだ。